

Classic Vicus

Vicus = ラテン語。地域、界隈の意。

Twitter

音楽界にも新たな情報発信の波

「情報化社会」というキーワードは1960年代に生まれた。それから半世紀の今日では、一個人がリアルタイムに文字、動画を瞬時にしかも容易に世界中に発信できるようになった。

メール、BBS（電子掲示板）、チャット、ブログ。そしてここ数年のTwitterの登場で、携帯電話の更なる進化と共に、他者とのコミュニケーション効率は飛躍的に拡大。コンサートの実況中継も動画を交えて可能となってきた。当協会の3月例会は、実演を交えての勉強会となった。

■英語のtweetは小鳥のさえずりの意。その動詞、Twitterは<つぶやき>と呼ばれている。

■3月24日（水）14:00~16:30：東京文化会館会議室

Webでの情報発信「ツイッターを探る」

ゲスト・スピーカー

岩田美紀氏（軽井沢八月音楽祭プロデューサー）
岡崎聰氏（ナクソスジャパン）
里神大輔氏（東京文化会館）
平井洋氏（音楽プロデューサー）
松本京子氏（おふいすべガ）
南出卓氏（ミュージックインク代表 会員）
コーディネーター 蔡田益資（会員）

ツイッターという言葉をにわかにメディアを通じて耳にするようになったものの、それがなんなのか理解できていない人は多い。

日本語版ツイッターが導入されたのは2008年4月。まだ2年しかたっていないので無理からぬところだろう。

しかし、実際に利用している人にとっては、まるで生まれてからずっと身体の一部となっているような錯覚にとらわれるかも知れない。

つまり、日々日常、頭の中で考え、口元でぶつぶつ言つてることが文字(140字)になっているだけだから。

岩田流活用



今回司会進行も務めた岩田氏がツイッターを始めたのは09年12月。個人的にはブログをやっていたようだが、ツイッターはとても入りやすかったという。その岩田氏のツイッターをのぞくと、自身の軽妙でちょっとアニメチックな言葉表現が日に何度も並ぶ。

日常の私事も明け透けに語り、そして巧妙に事業を紹介していて爽やか。自分で発した情報を何百人という人が見ているわけで、真にツイッターの機能をフル回転させているといえよう。



ブログ「平井洋の音楽旅」

永年音楽プロデューサーとして、幾多の事業に取り組んでいる平井氏はASAHIネットと協調する中で、自身ブログとホームページの中間的な「平井洋の音楽旅」というブログをもち、関係する様々な事象を丁寧に紹介している。ベーシックなフォーマットはデザインが簡単なモンブランを使用し、毎週水曜日に更新している。自分自身を発信することが本来の目的のようで、宣伝なら他の方法も必要という。

「東条硲夫のコンサート日記」

一方、「ヘルベルト・フォン・カラヤン」等の著書がある東条硲夫氏を紹介。東条氏は「東条硲夫のコンサート日記」というブログを立ち上げ、東京は勿論、大阪、九州、山形、札幌、そして世界各地等々の演奏会に足を運び、ほぼ連日のように音楽評論をリアルタイムで書いている貴重な方だ。5月現在、延べ40万人がアクセスしているようだ。新聞や雑誌では出来ないことを補完していることは間違いない。

岡崎聰氏はレコード会社が直面している課題を軸に、インターネット等の活用を紹介。

一般的にレコード産業は、音楽ソフトの多様化の中で危機に瀕しているという。CDソフトについていえば2008年と比べて80%の落ち込みという。しかし、会社としてはデジタルへの移行という流れの中で、インターネット活用による進化を予測して対応、



岡崎氏

日本法人では20人のスタッフが取り組んでいる。

新譜のPR効果について、従来型の「雑誌等紙広告」は、受注数で変化がないのに対し、「ツイッター・新譜告知ツイート」は受注数上昇傾向。「DeNA・モバゲーサイト」もアクセス数は上昇傾向にあるという。

またツイッターに関して言えば、米国では肉食的に情報取得(RT)をしているのに対し、日本は対話(QT)ツールとしての利用傾向が見られるという。

ツイッター・マーケティングを考えるならば、1:積極的にQTする事で関係を深めること、2:商品羅列だけのツイッターは読まない、3:毎日特定の時間帯にツイートすることで告知効果がある、と考えを述べた。

ネガティブな言い方をすると、ツイッターはネズミ溝的に広がっていく。・岡崎

里神氏



里神大輔氏は現在東京文化会館の職員として2011年の開館50周年記念事業等に取り組んでいる。

元々は民間会社のSE(システム・エンジニア)をやっていたこともあってコンピューターには強い。そのワザを駆使して、今日本のオーケストラのほとんどの情報を個人的に収集している。それに留まらず、ニューヨーク・フィル、メト、ロイヤルオペラといった情報も収集していく、個人だけで持っているのはもったいない感じ。

管理はもっぱら「クラウド・コンピューター」。前述の平井氏もそうだが、クラウドの活用はデータを持ち歩かなくて済む上、自身のパソコンが壊れてもデータはそれこそ雲の上にあるので安全というわけだ。

里神氏は更に、演奏の30分後にライヴCDを売る、そのことで、当日の演奏の質も向上させている事例も紹介。総じて海外の情報は肉食的、日本は草食的と評価した上で、販促の在り方についても工夫が必要と提言。

つぶやきまくる・・

宮川彬良氏のマネジメントを行っている、おふいすベガの松本京子氏のツイッターコラムは、勉強会参加者を圧倒したようだ。朝起きる、食べる、電車に乗る、会場に着く、アーティストのリハ、開場、開演、本番の曲目案内、演奏の推移、そして終わって打ち上げて寝る等々の一日の模様が間断なく書き込まれる。

もし今日、そのコンサートに行く予定の誰かがそれを逐一読んでいたとしたら。わくわく感が高揚しヴァン・デン・ベルクの性曲線ではないが、音の鳴った瞬間を頂点として、その方は快いエクスタシーに至るだろう。

つまり、観客の興味を我が方に引き寄せ、期待感を增幅させてしまうという点で効果を発揮しているように思える。アーティストの日常を公開することの危険を感じながら、以後もその書き込みペースは続いている。

浜田幸一（元国会の暴れん坊）

「ツイッターは無料で大量に配れるビラみたいなもの」



松本氏



会員でもある南出卓氏。

最近独立し、弦楽によるBloom Quartetを立ち上げる。

そのBQのPRに腐心する。まずはチラシをまく。一枚で一枚のチケットを売るつもりで。その上でインターネットを活用する。今はホームページからツイッターにシフト。アメブロ（Amebaブログ）を駆使してツイッターの速射砲。もちろん動画YouTubeも連動。



南出氏

チラシをまいた直後からアクセスがあるという。そして、それを時間、日ごと、月ごと、年令、そして出演アーティスト個々へのアプローチ状況と細かく解析、データ化する。勉強会のスクリーンにその手際のいい解析模様が披露されると会場から感嘆の声があがる。

さて、今回の勉強会は会員以外に多くの業界関係者が参加した。音楽事務所、公共ホールの方、大学関係者、演劇、音楽雑誌社等々の方。

ツイッターという言葉ぐらいは知っていても、それがどういうものなのかわからない人も多かったように思う。

実際に「こういうものがあることで驚いている」「こんな事で世の中が動いているのか」「そっちだけの世界？」などの言葉が参加者から寄せられ、質疑も活発に行われる。

そうした中、業を煮やしたのか、ついにはスクリーン上で、実際にツイッター登録の「実演」が挙行される。

やって見せたのは南出氏。そしていつも簡単にやってみせると、たちまち参加者からのフォローがある。そんな現場風景に時代の凄まじさを感じた人も多かったのではないかだろうか。

ツイッターはまだ始まったばかり、世のあらゆる階層が益々利用するに違いない。小さな個人から米国大統領まで、その効用は利用する一人一人の器量にかかっているだろう。

■ 報告：伊勢谷 宣仁

Memo.

■ ツイッターは2006年米国の現ツイッター社が開発したミニブログ的服务。日本には2008年4月に導入され、首都圏を中心に現在650万人が利用しているとされる。書き込みできる文字数は140字。

■ ソフトバンク社の孫正義社長は、2010年1月、グループ企業の2万人にツイッターの利用を指示。自身もまめにつぶやき、フォロワーは28万人に達している。

■ 秋田県の横手市ではツイッターによる町おこしを開始。市職員5人が交代でつぶやき発信。他、青森県でも行政情報を流し、2700人が見ているという。又、埼玉県の松伏第二中学校では、学校行事等の情報を先生が保護者へツイート、好評を得ていること。



音楽プロデューサー協会が発足してから早いものでちょうど10年になる。

2000年4月の創立当時は家永音楽事務所代表・家永勝氏が代表幹事・事務局長を務められたが、氏が退かれてからは、代表幹事1名・事務局長1名を含む4人の幹事による現体制で運営が続けられている。会員総数は約30名。残念ながら休眠会員のような人も多い。

その一方で、最近になって入会希望も多く、新会員が少しづつ増える傾向にある。

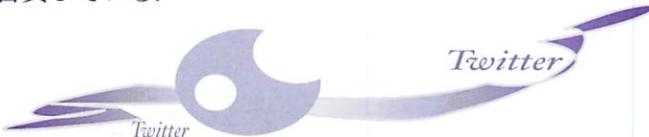
これは、不定期ながらも2~3ヶ月に1度の割合で、外部からの参加者も対象にして、勉強会を開催していることが大きく影響していると思う。

会としての主な運営である毎月1回の例会のほかに、課題を決めて講師を招いたり、ディスカッションの形を取りながら、会員以外の参加も呼びかけている。また、この勉強会に参加した後は、それぞれ「アフター・ファイブ」と称して有志でノミニュケーションにも励んでいる。

この硬軟併せての機会を通して、本会の方針に賛同されて入会を希望するというケースが多いようだ。

昨年は勉強会を始めて以来最多の回数で、年間6回の勉強会を開催した。

勉強会の詳しい内容に関しての記述は他に譲るが、かなり内容の濃い有意義な勉強会が持てたのではないかと自負している。



今年の勉強会を一例にあげてみよう。

2010年第一回勉強会は、3月24日に開催し、「ツイッターの使用方法について」という議題のもと、6人のゲストスピーカーを招き、コンピューターで操作しながらその画面をスクリーン上に提示し説明するという形で進められた。また、実際に、勉強会が始まると同時にツイッター上でも「プロデューサー協会ツイッター勉強会始まりました」と実況中継が始まり(Ustと言うらしい)、少数ながら外部からのアクセスもあった。これがまさしくツイッターの良さで、その場その時点で実際の内容を中継することが出来、それに対して、実際にその場に在席していないても、ツイッターによって会合に参加出来るのである。

勉強会の後、使い始めてますます実感したが、確かにこの「つぶやき」によってリアルタイムの情報が入手出来る。つまり、うまく使い方を選べば、演奏会の宣伝もリアルタイムで出来る。例えば、ツイッターを読んでいると、「今指揮者が来て演奏会の会場練習が始まりました」「思っていた通り、かなり迫力のあるマーラーが演奏されております」と言ったように「今晚」の演奏会の宣伝にもなるようなことがつぶやかれている。

一方では「18時からの当日売りにすでに10人程の方がならんでいます」「本日は残席が少なく、30枚程しか

チケットがないという話ですが、開演前に売り切れになってしまうのでは!」などの情報も見える。

このように「140文字のつぶやき」によって、現時点での状況が分かるというのは、今までにない画期的な事なのではないだろうか。その上ツイッターは始めるのも簡単なのである。

このスピード感を持った情報提供の方法は、情報化社会と言わわれている現代ならではと思う。

今回の勉強会のテーマは、幹事の一人である藪田益資氏のアイデアによるものだが、今までにこれほど大きな反響と効果があった勉強会はなかったのではないかという気もしている。

日本人は飽きやすいし、または、これ以上の情報伝達方法が開発されるかも知れないが、利用方法をもっと研究すれば面白いことが起こるのではないだろうか。

(ちなみに、余談にはなるが、勉強会直前、たまたまツイッター上で「校了したからこれから編集長とツイッターの勉強会をしよう」とつぶやいたツイッター初心者のお二方に、この勉強会の事をツイッターで知らせ、締め切り間際・定員でお断り寸前にすばり込みセーフという例もあった。時間差なくカバーしたのがツイッターの早さ!)

このように有意義な勉強会を開催している一方で、会員の参加者が少ないと事実が私の悩みであり、この点を何とか改善したいと思っている。

現在のような不況の時代には、営業を強化して売り込みに専念したいという会員も勿論多いと思うが、実はそれ以上に、こういった情報交換の場を有効活用することが何倍もの営業効果があるに違いないと考えているが、会員諸氏のお考えはいかがだろうか。

組織には適正規模というものがあり、これ以上会が大きくなる事が果たして良いのか、または100人程度まで会員数を増やして行くほうが良いのか、それは何とも答えが出しにくいところだが、会員である以上は会に参加する義務があると思っている。

諸般の事情で出席出来ない場合は、せめて欠席届くらいは出して欲しいものだ。

それとも、運営者サイドの問題として、会員に対して魅力あるマネジメント(運営)がなされていないのか。

ツイッターならぬスロッター(長考?)の私は、今日もそんなことを考えている。

(株) 東京アーティスツ 代表取締役

携帯とパソコンの間を埋める

iPad 国内発売

Webの閲覧、電子メールの送受信、写真、HDビデオ、そして音楽鑑賞が、簡単な指タッチで鑑賞できるiPadが、5月28日、米国に次いで世界9カ国で発売された。米国で4月に発売されたものは既に100万本以上のコンテンツ、25万冊分の書籍がダウンロードされたという。日本でも大手の出版社が電子書籍に参入するといい、今後の展開に目が離せなくなった。680グラム、厚さ1.3センチのタブレット型コンピューターiPadは、魔法の手帳だ。

成果を上げる劇場

100本余りの自主事業をほぼ完売

武藏野市民会館の取り組み

前線に立つ栗原一浩氏に聞く

取材：伊勢谷宣仁（会員）

集客はどこの誰もが苦労をしている。

そんな中、武藏野市民文化会館を管理する（財）武藏野文化事業団は、年間100本余りの自主企画事業のほとんど全てを完売させている。その原動力になっているものは何なのか、他とどこが違うのかを、その事業団の推進役となっている課長の栗原一浩氏にお話をうかがった。

同会館は1984年に開館。1350席の大ホールとパイプオルガンが組み込まれた474席の小ホールを有している。双方とも主に音楽向けに利用されている。

中央線三鷹駅の北口を背に真っ直ぐ15分ほど歩いたところにあり、周りは住宅密集地といった趣き。中央線沿線では少ない本格的なホールの誕生として、当時は大きな関心を集めたように思う。

04年に始めた国際的なオルガンコンクールも注目を集めめた。開館当初の数年は話題性もあり多くの入場者もあったようだが、他の場合と同様、年が経つにつれて影が射てくる。

栗原氏は東京生まれ。父は武藏野市民文化会館の立ち上げ担当だった。小さい頃から父の影響でクラシック音楽を普通に聞いて育つ。6才でヴァイオリンをならう一方、聞く音楽は名曲以外のものが中心で、自動的に買ったレコードはメシアンなど、いわゆる現代物ばかり。つまりクラシックの絶対的な感性は幼少年期に培われたようだ。

さて、早大を出た後、栗原氏は武藏野市役所に奉職、教育委員会配属となる。

そして30才の時に文化会館に配属される。アフター5は音楽三昧だったのが仕事として向き合うことに。氏の大きな転換点となる。

当時、開館の自主事業はガラガラ状態だったようだ。そこに音楽好きの虫がうごめく。

「クラシック音楽が嫌いな人を好きにすることは難しいんです。しかし、知らない人を好きにさせることはできると思います」

訪問した私に最初に発した栗原氏の言葉だ。氏の信条、哲学？

いい音楽を聴いてもらいたいという一念は手作りのチラシ製作から始まる。

一からのスタート＝まずは足を使ってとにかくチラシを配りまくる。集会所、喫茶店、飲み屋、各種施設、etc。役人のホールに宣伝費はない、特別のテクニックはない、基本は努力、努力して入らない演奏会はない、机に向かっていては売れない、朝から、晩まで、年がら年中、チラシを配る、置く、配る・・・そのチラシは黒一色、「採算度外視」「東京なら〇万円、武藏野なら6千円」「1000枚突破」等々の大きな文字がA4版の紙を埋める。

貧乏くさいチラシとも言われる、でもかまわない・・・。



栗原氏

そして、それは3年で形になった。当時1000人だった友の会の会員は現在8000人になった。

これら一連の活動の推進役となつたのが栗原氏だった。

会館の受付に立つと、現在でも手作りのチラシが並ぶ。それは今や名物とさえなっているようだ。

また壁のチラシには「完売」と赤い文字が輝く。

2010年時点で年間110本の自主企画。その80%はクラシック系。他にジャズ、ポップス、古典も取り上げる。

「日本では有名なものを追いかける傾向があります。でも世界には無名でもすばらしい演奏家が沢山います。それを発掘して120%の力を發揮してくれたら80%の力しか発揮しない巨匠を上回るんです」。



真に地域から愛される施設の実現を

客が感動してくれるものならなんでも取り上げる。逆に感動を与えないものは止める。取り上げる作品は懲りすぎても、特化しすぎてもいけない。会館としての独自性、スペシャリティも必要という。つまり、フランス料理屋でハンバーガーも豚足も出す、それでいいと。あの親父が作ったチャーハンが食べたい、と思わせるような自主企画が肝心なようだ。

長年培ったノウハウ、人脈で海外のアーティストに対し独自に直接呼びかけることもあるが、逆に相手からのオファーも。毎年クリエイティビティが上がっているようだ。

会館は指定管理を受けて、現在二期目。市からは一定の助成もあるが、民間からの助成はない中で、他の会館では手のつけにくい事業をこなしながら採算ベースをしっかりと堅持している。

そしてこの上は、例えばオペラハウスのある、ドイツの地方都市マンハイムのように真に地域の人に愛される施設でありたいと願っているようだ。

また管理職として、若い人たちがアイディアを出し合い、楽しい環境を自ら作り上げる、少ないスタッフの中で全てが出来る人材が育つことを願うと同時に、今の体制をメソッド化できれば幸いという。

民間なら成功報酬があるだろう。しかしそれはない。

ただひたすらいい音楽を求めている人に尽くす。それがやはり信条、哲学のようだ。

「朝から晩まで、仕事のことを考える。どうしたらうまくいくか」

今も考え行動する栗原氏等会館の実践に、刺激を受ける業界関係者も多いのではないだろうか。

2010年3月の自主事業

★全て完売御礼★

- | | |
|------|-------------------------|
| 3/4 | メタフォー弦楽四重奏団 |
| 3/9 | M.クファーバリトリサイタル |
| 3/12 | A.ショルカウンターテノール・リサイタル |
| 3/14 | 藤原真里チエロリサイタル |
| 3/15 | ミリアム・ヘレン国際シンクール入賞者リサイタル |
| 3/20 | P.ブリンドルフ/オルガニサイタル |



成果を上げる劇場

劇場施設運営の成果を顕彰

JAFRAアワード・総務大臣賞

(財)地域創造の授賞施設

JAFRAは(財)地域創造が平成16年度、財団の設立10周年を記念して創設したもので、地域における文化・芸術の振興において功績のあった公立文化施設を顕彰しているもので、これまでに42館が表彰されている。以下にその一部の活動を紹介する。

(財)石川県音楽文化事業団の活動

石川県音楽文化振興事業団は、オーケストラ・アンサンブル金沢が運営の主体を担っていて、劇場の運営形態としては、全国的に珍しい。

施設は「県立音楽堂」と称し、パイプオルガンを組み込んだ専用のコンサートホール(1560席)の他、これも珍しいが邦楽ホール(720席)と交流ホールを有している。

今回受賞の理由となったのは、プロの演奏団体であるオーケストラ・アンサンブル金沢のノウハウを活かして、地域、住民とホールが一体となった様々な舞台活動を開催したことが評価されたようだ。

アンサンブル金沢は年間110回のコンサートの内、約60回を県内で実施している。運営では会館としての自主事業を大小様々な企画を織りまぜるなど年間70回ほどを開催している。

オペラや、アウトリーチ、そして街中コンサート、駅コン等にも積極的に関与し、地域の舞台芸術活動のまさに核となっているようだ。

茨城県・小美玉市「四季文化会館みの～れ」

「四季文化会館みの～れ」は<森のホール>(600席)と<風のホール>(300席)を有している。

ここでは、市民参画を運営の柱に据えているようだ。毎年200人が、「ときめき隊」「陽だまり隊」「みの～れ支援隊」等々の部門別グループを組織し、おやこコンサート、マタニティ・コンサート、楽器ワークショップ、舞台表現ワークショップ等々の自主的な事業を活発に展開している。

中でも、みの～れ支援隊約160名は、日々のホール運営を支え、地域の人材育成等にも大きな貢献をしている。

(財)埼玉県芸術振興財団、(財)静岡市文化振興財団も

他にクラシック音楽、コンテンポラリーダンス、そして蜷川幸雄を擁して実施される演劇活動等々、公立劇場の新たな道を邁進する(財)埼玉県芸術文化振興財団も受賞。

また、1995年に開館して以来、若い音楽家を積極的に登用し、現代音楽の委嘱や、「子どものための音楽広場」の運営をするなど地域の音楽文化の普及・発展に尽力している(財)静岡市文化振興財団等もJAFRAを受賞した。

誰がどんな形で何に取り組み、そしてどんな成果を上げているのか。斯界の発展のために大いに参考になる。

冬の時代を生きのびよう

民主党の事業仕分け・・・・

「埋められないホールは、順次廃止を」

志村嘉一郎(会員)

5月21日に行われた事業仕分けで、地域創造の地域の文化・芸術活動支援事業と公共ホール活性化事業は、ともに「見直しを行う」結果だった。どのような見直しを行なうのか、インターネットで調べたが、行政刷新会議のページでは「地方の仕事、埋められないホールがあるならば、順次廃止すべき」とか、「地域文化活動支援は、地域活性化に役立つ部分があるが、地域に根ざした事業となっていないので、見直す必要がある」などと意見が羅列されているだけ。

テレビなどで事業仕分けが派手に報道されているが、音楽や舞台のプロデュースの専門家が仕分けをやってるのでなく素人による仕分けで、結果はよくわからないものだった。

「民主党政権の芸術政策はどうなのか」。

去年の総選挙で配られた民主党の政権公約マニフェストを開いて見た。B5版24ページに政権公約がびっしり書かれているが、芸術に関する記述は一字もなかった。

自民党時代の芸術政策は、文化庁の官僚を中心につくっていた。音楽議員連盟や芸術議員連盟などが、自民党政務調査会を通じて、関係官庁に音楽や芸術の振興策をやらせてきた。

民主党政権になってから小沢幹事長が党の政策調査会を廃止し、議員からの政策提案は受け付けないシステムにしてしまった。関係官庁も事務次官を干してしまい、議員の副大臣や政務官に各省庁の政策立案を担当させるようになった。このため、マニフェストに盛られているバラまきの派手な政策ばかりが取り上げられ、音楽や芸術などの地味な政策は、見向きもされなくなったのである。

音楽など芸術を振興させるには金がかかる。

ルネッサンス以降、音楽や芸術が発展したが、これらを理解するスポンサーが惜しみなく金を出して来たからである。

現代の日本でも、政府や自治体、企業が金を出さなければよい音楽や芸術は生まれない。それを作り出すのが人間で、ある程度豊かな生活の中で創作せねばならないからである。

音楽会などを「入場料収入だけでやっていけ」といわれても、長続きするわけはない。よい芸術活動を続けるには、スポンサーが必要なのである。政府や自治体の芸術予算を削るなら、税制を改正して企業や個人が芸術活動に寄付した場合、無税にするなどの振興策をすすめるべきなのである。

鳩山、小沢の民主党ツー・トップは、厳しい世論に押しきられる形で辞任した。しかし民主党政権がつづく限り、音楽や芸術活動への理解はすみっこに追いやられてしまうと考えられる。

つまり、音楽や芸術活動にとって冬の時代が続くと見られ、この中でいかに生き延びるかが、勝負といえよう。

(ジャーナリスト 帝京大学教授)

音楽プロデューサー協会、活動状況のご報告です

2009の活動

from 2009

1月21日(水)名刺交換新年会

協会会員13名、会員外27名にご参加いただき、名刺交換を行ながる新年会を開催(代々木・アルテ工房)。

毎回、クラシック音楽界の多方面の方が集まり、活気に満ちたものになっていたように思います。

2月17日 勉強会

兵庫県立芸術文化センター
事務局長・藤村順一氏をお迎えして・・・

兵庫芸術文化センターの成立までの過程、財政的な基盤、運営の実際や鑑賞活動について、そして現在行っている自主事業やネーミングライツについて、詳細な数字も含めてお話しいただきました。

3月19日 勉強会

鶴沼室内楽愛好会の平井満氏

平井氏と会員の藪田益資氏による、音楽ビジネスの話を伺いました。

◆鶴沼サロンコンサートの運営に協力していらっしゃる鶴沼室内楽愛好会の平井満氏は、この会を1990年に発足させ、2009年3月のサロンコンサートで272回目になります。60人定員の鶴沼のレストラン「ラーラ・ピanke」を使って一流の演奏家を呼び、約20年に亘ってコンサートを開き続けてこられました(現在はレスプリ・フランセにて開催)。長きに亘り継続して来た力はなんだったのでしょうか。また、平井氏はそのノウハウを生かし、横浜市港南区民センター「ひまわりの郷」でも新しいコンサートシリーズを始めています。

「ひまわりの郷」は指定管理者だけであれば年2回のコンサートしか出来ません。しかし横浜楽友会の参加協力で年間6回までやれるようになったということです。

指定管理者制度のあり方を考える意味も含めお話を伺いました。

<鶴沼サロンコンサート>

<http://www2s.biglobe.ne.jp/~kurobe56/ksc/ksc.htm>

◆音楽プロデューサー協会会員の藪田益資氏は、1959年1月、大阪フェスティバル協会の仕事を始めました。同年6月梶本音楽事務所に移り、彼のキャリアは本格的なスタートを切りました。現在もインターネット「クラシック・ニュース」にて元気に活躍していらっしゃいます。2009年、音楽生活50年を迎えるその貴重な体験をお伺いし、大変有意義なものになりました。

インターネット「クラシック・ニュース」

<http://classicnews.jp/>

4月15日 例会

会員のみで親睦旅行について、文化会館の指定管理者

の問題に関するその他、今後の勉強会について意見交換。

5月21日 勉強会

松尾楽器商会/社長 松尾治樹氏
調律師 外山洋司氏

調律師外山洋司さんにピアノの調律・調整に関するお話をと、松尾楽器商会社長の松尾治樹氏に、スタインウェイピアノの輸入についてのお話を伺いました。

◆ピアノ調律について: 松尾楽器商会 外山洋司氏

「公共施設におけるコンサートピアノの保守管理と運用について」ということで、ピアノの細かい構造を紹介しながら、コンサートピアノの保守と管理、運用上の注意点、またより良い公演を実現させるために、ピアノのコンディション作りのための調律作業や、調律の方法、調整の方法についてお話をされました。

◆スタインウェイを輸入して55年: 松尾楽器商会社長松尾治樹氏は・・・

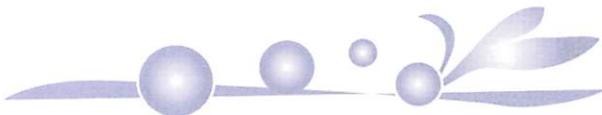
日本にスタインウェイピアノを紹介し、それを普及させるにあたっての大変なご苦労のお話を、1940年代後半～1960年くらいの、当時の演奏家や当時のホールなどの大変貴重な写真を紹介しながらお話をいただきました。ローゼンシュトック、クロイツァー、カラヤン、近衛秀磨、若き日の尾高尚忠、原智恵子、山田一雄などの写真は本当に貴重なものでした。

(※今回のこの勉強会は、評判を呼び、関西の音楽業界の集まりで再演されました。)

6月18日 例会

会員のみで7月の親睦旅行について、今後の勉強会の方針、内容について相談しました。

7月7日、8日の一泊2日で、東伊豆・北川温泉・吉祥亭に行きました。



7月22日 勉強会

勉強会は、講師を招かず討論会形式にし、「音楽プロデューサーとは何か?」「広報・宣伝に関する考察」という内容で、活発な意見交換の場となりました。

◆始めに会員の藪田さんから「プロデューサーとは何か?」という事を話してもらい、続いて「宣伝方法に関する考察」について討論をしました。「いかに効率よく広告するか」、「現在行われている広告の方法以外に、もっと効率よく効果的な方法はないものか」を、出席して下さった方々と討議し、どのように実行するのが良いか、効率よく経費をかけない方法を率直な意見交換の場として、今後の券売に活用出来るよう話し合いました。

その他に出席者からの情報発信の場として、数人から発表をしてもらいました。

9月16日勉強会

『チケット販売の今』と題して、各プレイガイドの担当者を呼んで勉強会を開きました。

◆皆さんが苦労している、「広報や宣伝」ですが、その延長線上にありますチケット販売に関しても、これからは経費削減の為に販売委託先を減らす事や、効果的に販売するにはどこの業者に頼むのがよいか、などを、検討していく事も必要ではないかと思います。そこでこの回は、各プレイガイドの担当者をお呼びして、お話を聞き、質疑応答などを行いました。

1. 大手の一つとして「CNプレイガイド」

担当：松井 様

2. 「ゲッティ」のシステムを使用し、格安で演劇を中心へ委託件数を増やしている、

「カンフェティ」担当：ロングランプランニングの博松様、株木 様

3. 今年4月より運営会社がSPSとなった「東京文化会館チケットサービス」担当：小走 様

以上3社をお呼びして、お客様の立場にも立ちながら、比較検討して行いました。東京文化会館に関しては、使い勝手が悪くなつたことを伝え、委託する側の使い易いように、お願いしていきました。各プレイガイドの販売状況や販売の仕方等、三者三様のお話を聞き、今後のチケット販売に関して、大変参考になるお話をでした。

また後半に、数人の参加者による、宣伝広報の為に発言する場を設けました。実際に直接公演の宣伝には繋がりませんが、協会会員、会員外を問わず、良い交流の機会になりました。

10月14日 例会

会員のみで!今後の勉強会の内容や、会報について相談しました。

11月18日 例会

会員のみで1月の新年会について、今後の勉強会について、政府の行政刷新会議「事業仕分け」による今後の影響について、話をしました。

◆「事業仕分け」というもので、芸術・文化に対する、助成の減額や廃止などが、発表されました。実際に減額、廃止となれば、学校に演奏家を派遣している事務所やオーケストラ、また新国立劇場の公演に出演しているオーケストラや日本人演奏家に、直接大きな打撃となることは間違ひありません。場合によっては、皆で大きな声を挙げてもいいのではないでしょうか。他の団体と行動を共にすることも含め相談しました。

12月16日 勉強会

「東京・春・音楽祭」実行委員長 鈴木幸一氏
事務局 芦田尚子氏

前半に「東京・春・音楽祭」事務局の芦田尚子さんに来年の企画について伺いました。また、角川グループの「TICKETS @ TOKYO」という当日券販売のシステムについて担当の方に話を伺いました。

後半は(株)インターネットイニシアティブジャパン(IIJ)社長であり、「東京・春・音楽祭」の実行委員長

でもあります、鈴木幸一氏をお迎えして「クラシック音楽に関わりを持つて」というテーマでお話を伺いました。

◆鈴木幸一氏は1992年に(株)インターネットイニシアティブ(IIJ)の企画を立ち上げました。その後「IIJ」を、わが国を代表する世界的IT企業として、今日のような成長をさせたことはご存知の通りです。私たちの身の回りのメールやインターネットをはじめ生活の驚くべき変化は、このようなIT企業がリードしてきたからです。そのIIJを立ち上げた当初から現在までのお話を駆け足でお聞きしました。

また、2005年よりスタートした「東京のオペラの森」から、現在の「東京・春・音楽祭」実行委員長としてクラシック界にも関わっていらっしゃいます。その面からクラシック界がどのように、ITのようなデジタルの世界と融合していくか、または使用していくか、というお話をお聞きしました。ただクラシック界には著作権の問題がある、音楽配信や、演奏会の配信等、なかなか簡単にはいかない所が一番の問題点ではないか、とお話をされていました。

報告：丸田 朗（会員）

Vicus



文化庁の文化審議会

文化政策のワーキング・グループが会合

国の文化政策を担う文化審議会（文化政策部会・国語文科会・著作権文科会・文化財文科会）の内、本年の文化政策部会が、3月のワーキング・グループ(WG)の設立を受け、5月12日に会合を行った。

舞台芸術WGの委員は、堤剛氏（桐朋学園大学学長）、サントリーホール館長）、高萩宏氏（東京芸術劇場副館長）、支倉二二男氏（(社)日本オーケストラ連盟常務理事）、中山欣吾氏（(財)東京二期会常務理事）等々。

以下に、会合で提言された主な点をまとめてみた。

■日本の文化予算は諸外国と比べて圧倒的に少なく、これでは我が国の世界の文化芸術の発展に本来貢献すべき役割が果たせないので、国として予算を大幅に拡充する必要がある。

■地域の文化芸術拠点の振興に当たって法的基盤の整備。
◇文化施設の数は増加したが、関係予算は減少しており、十分な舞台芸術の提供・実施ができない状況がある。又、指定管理者制度の導入により経済性や効率性を重視するあまり、事業内容の充実や人材の確保等施設運営が困難になっている状況もある。

■専門家による審査・評価制度の導入。

◇日本版アーツカウンシル（仮称）の導入で申請団体が事業で設定した達成目標を見定め、成果を検証する仕組みをつくる必要。

■子ども達が優れた舞台芸術にふれる機会の拡充。

■支援制度の抜本的見直し。

◇収入の増加を促す観点からインセンティブの導入の他、会場費など経費を限定した助成の仕組みを模索。

いずれにしても、国自体の借金が膨らむ中で、文化予算の拡充は望めそうにないのが現状だろう。

5月中旬発表=締め切り5月31日・・・文化庁助成事業の課題
「優れた劇場・音楽堂からの創造発信事業」募集
既に22年度の予算が固まり、事業が執行されている最中、突然文化庁から発表された補助事業について戸惑いの声。

この補助事業の支援対象事業を読むと・・・

1. テーマを定めた舞台芸術フェスティバル
2. 専属、フランチャイズの団体による公演など優れた舞台芸術の自主企画制作公演
3. 舞台芸術の公演及びこれに合わせて行う次の取り組み：○ワークショップ ○パックステージ ○アマチュア団体との合同公演等々。
4. 近隣の複数の劇場・音楽堂による舞台芸術の出張公演、等々とある。

総額で16億円の予算で、全国80地域の劇場の独自企画に対して支援するという。補助率は例によって支援対象経費の2分の1。この事業はどうも昨年の事業仕分けの産物らしい。旅費・運送費を補助してきた「舞台の魅力発見事業」の中止を受けて出てきた新事業といわれている。常識的に見て新年度当初に、当該年の新規事業を立案することはたいへん難しい。事前の予告はあつただろうか。自治体は補正予算で対応？「舞台の魅力発見事業」は旅費の100%補助という点、文化事業の全国的な平等化に一役買つていただけに残念だし、これに打撃を受けた芸術団体や、劇場も多いに違いない。

さて、それでも尚、今年度これを有効活用するしたかさを、私達は持ち合せているだろうか。

音楽プロデューサー協会・会員

在原 勝	(株) 東京プロムジカ 代表取締役
家永 勝※	(株) 家永音楽事務所 代表取締役
石川尚樹	(株) コンセール・ブルミエ 代表取締役
伊勢谷宣仁	オペラ季節館 代表
上野喜浩	すみだトリフォニーホール プロデューサー
江藤昌子	こぶしくらぶ 主宰・プロデューサー
大庭泰三	(株) メリット・エンタテインメント 代表取締役
小川光彦	公益財団法人多摩市文化振興財団 (パルテノン多摩) 副主幹
小尾 旭	(株) ミリオンコンサート協会 代表取締役
加藤ケイコ	(有)レックス 代表取締役
兼岩好江	(有)アルシュ 代表取締役
博松大剛	ロングランプランニング(株) (カンフェティ) 代表取締役
黒川浩明	(有)大阪アーティスト協会 会長
小林信一	合唱音楽振興会／東京混声合唱団 常務理事・事務局長
境 新一	境企画代表、成城大学教授
佐々木仔利子	NPO法人日本室内楽アカデミー 理事長
佐瀬 亨	せきれい社 (雑誌「サラサー」発行) 代表取締役
佐藤 豊	アートセンター 代表
志村嘉一郎口	ジャーナリスト、帝京大学教授
白神克敏	(有)白神ピアノ調律、(株)ヴォイシング 代表取締役
戸部由起子	(有)エクレジアアーツ 代表取締役
中根俊士◎	(株) 東京アーティスツ 代表取締役
萩生哲郎	ナクソス・ジャパン(株) デジタル事業部
原 聰之	(株) コンサートオフィス・アルテ
広瀬 清	(有)新演奏家協会 代表取締役、NPO法人日本青少年音楽芸能協会 理事長
松崎三恵子	(株) シド音楽企画 代表取締役
丸田 朗△	(有)マルタミュージックサービス 代表取締役
南出 卓	ミュージック・インク 代表
村上雄一〇	(株) ユーラシック 代表取締役
村田 亨	(株) テレビマンユニオン 音楽事業部
藪田益資〇	クラシック・ニュース プロデューサー

◎代表幹事 ○幹事 ◇事務局長 □監査 ※は名誉会員

楽屋のゴミ処理について

◇ゴミは、

- ・燃えるゴミ
- ・燃えないゴミ
- ・ビニ・カソ・ペットボトル

分別して、楽屋前のゴミ箱へ入れてください。

◇吸盤は、湯沸室内の吸盤入れに捨ててください。

◇業者配達の弁当箱や大量の弁当箱についてはお持ち帰りください。

◇ごみ袋を袋詰めの状態で投げるのは、楽屋で引受けます。弁当箱から出したごみ袋(袋詰め)は「ごみ箱」に入り不得え。また、ゴミ袋を「ごみ箱」に入れたあと、「正面出入口」の横に置く形で引受けます。

◇取扱いはつぶして置んでゴミ箱の脇にまとめて出しておいてください。

ゴミの分別が悪いと、ゴミはすべて持ち帰っていただく事となります。

ご迷惑がかかるかもしれません。

名古屋市青少年文化センター

◇ゴミは、分別して楽屋前のゴミ箱へ入れてください。

名古屋市青少年文化センター

当協会の会員の一人。

クリスマスコンサート終了後、さる会館からゴミを持ち帰るよう言われ、やむなくゴミ袋をサンタのように担いで電車の人となる。

地方に行ってゴミの処理に困る出演者は多いと思う。袋代数百円かで処理してくれる施設もあるが施設使用料にくらべればわずか。最初から組み込めばいいのではないだろうか。上記のように、そのまま捨てさせてくれるところは珍しくありがたい。

カザルス・ホール閉館



1987年に開館され、コンサート専用ホールとして親しまれてきたカザルス・ホールが惜しくも閉館した。

同ホールは、主婦の友社が出資する(株)お茶の水スクエアによって設立された。文化財的価値のある旧主婦の友館を復元する形で磯崎新氏が設計、様々な室内樂の企画を通して多くの利用者があり、一時期はコンサートホールの殿堂とさえなった。1997年には創立10周年を記念して、ドイツ製のバロック様式のオルガンを設置。

しかし、主婦の友社の資産整理に伴い、2002年に日本大学に譲渡され、「日本大学カザルス・ホール」として外部貸し出しをしていたものの、2010年3月末をもってついに閉館となった。

この後どうするのか明確なことはわかっていない。一年程度はオルガンもメンテナンスされ、大学内部では利用されるようだが、そう遠くない内に更地にされる模様。

公共の劇場は民間への外部運営委託が主流だが、価値あるカザルスホールを、国や東京で所有しようという度量がこの国はないのだろうか。

日本大学も大学の目的・使命に「心身ともに、文化人を育成することを使命とする」と掲げている。オルガンの行方とともに、その使命を自ら葬るのだろうか。

音楽プロデューサー協会 Classic Vicus 7号

編集・文責: 伊勢谷宣仁

進行: 大庭泰三

〒273-0037 千葉県船橋市古作3-1-15-308 (マルタミュージックサービス内)

電話: 047 (335) 2002 FAX: 047 (335) 2062